

ツマグロゼミを発見した黒岩 恒氏について

— 発見のいきさつと黒岩 恒氏の人生 —

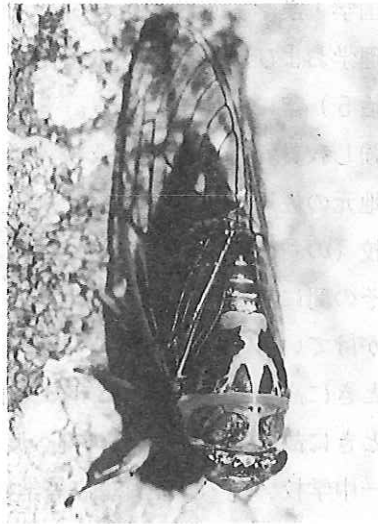
岩 井 洋 一 (上野村教育委員会)

1. ツマグロゼミ発見のいきさつ

ツマグロゼミ *Nipponosemia terminalis* (Matsumura) (第1図) は、1913 (大正2) 年、当時の北海道帝国大学 (現・北海道大学) の教授であった松村松年博士によって“沖繩 (八重山、宮古島)、支那 (四川州)” を模式産地として記載命名された。このときに用いられた標本は、1912 (大正1) 年に当時の沖繩県立農学校校長で、沖繩の自然界の学問的開拓者である黒岩 恒 (くろいわひさし) 氏 (以後敬称略) (第2図) によって、宮古島ならびに八重山から発見・採集されている。

黒岩は、1912年から1925 (大正14) 年までの13年間にわたって種子島以南の琉球列島の淡水魚類の調査を行って重山など先島地方へ調査グロゼミは、おそらく、ものと推測される。黒岩然地理関係の調査資料を自ら発表した。標本の門の研究者により発表さ

黒岩は、先島地方調査くをそれぞれの専門の研究の中でも、セミやカメムシの昆虫は松村松年博士に記載命名された。ツマグ



第1図. ツマグロゼミ

おり、1912年、宮古島・八のため訪れている。ツマその調査の際に採集されたは、沖繩の動物・植物・自もとに数多くの研究成果を一部は学界に提供され、専れたものも多い。

の際に採集された標本の多究者に送っている。それらシなどのカメムシ目に属す送られ、新種などは新たに

採集品として松村松年博士に送られ、1913年、新種“ツマグロゼミ *Abroma terminalis*”として記載命名された。宮古島での採集場所については不詳である (さらに文献や模式標本等を調査すれば採集場所を確定できるかもしれない)。

また、黒岩の調査に同行した人員についても不詳であるが、おそらく黒岩1人ではなかったものと考えられる。その理由は、膨大な採集品があったと思われること、そして当時の島内交通が不便であったことが推測されるからで、たぶん、数人の弟子 (教え子) が助手

として同行したものと思われる。さらに、現地には案内人がいて、調査・採集の便宜を図ったものと思われる。

ツマグロゼミを発見したころの黒岩は、年齢54歳、沖縄県立農学校の校長の役職にあり、学校経営のため多忙であった上に沖縄県立糖業試験場技術員、沖縄県産業調査会委員、大日本農会農芸委員などを委嘱され繁忙をきわめるが、動・植物や農・林業の調査研究をも継続していた。

この2年後の1914（大正3）年、農学校を辞めるまで生徒の教育と学校経営の向上のために尽力し、多くの人材を社会の各方面に送り出し、ついに沖縄県立農学校を千葉県立農学校、鹿児島県立鹿屋農学校とならんで日本の三大農学校として全国的に知れわたるまでに築き上げた。

2. 黒岩 恒氏の一生

黒岩 恒（1858年8月8日～1930年5月25日：安政5年～昭和5年）は、1858（安政5）年8月8日、高知県高岡郡佐川町立野に生まれ、国学・漢学・英語・数学・生理学・地理学・天文学・物理学および土佐南学（朱子学の一派）を学び、1875（明治5）年に学徒を終える。その後は独学で専門学科を勉強し教員資格を得た。その翌年の1876年、19歳のときに地元の佐川小学校に勤務した。その後、高知県尋常中学校（のちの旧制中学校）や高知県農学校で教鞭をとり、その間に高知県内の動・植物や自然地理の調査研究を手がけている。



第2図. 黒岩 恒氏（写真は沖縄タイムス社提供）

1886（明治19）年、29歳のときに高知県東津野村出身の又川 馬と結婚している。

1892（明治25）年、35歳のときに故郷・高知を離れ沖縄へ渡り、沖縄師範学校兼沖縄尋常中学校（のちの沖縄県立第一中学校、現・県立首里高等学校）で博物および農業を教え、教務のかたわら沖縄本島はもとより各離島に出向き精力的に沖縄の動・植物や自然地理を調査し、中央の学界に多くの標本を提供するとともに自らも多くの研究成果を発表した。

さらに、黒岩は農業改良にも意を注ぎ、紀州ミカン、カンラン、ナスなどの種苗を日本本土より導入し、師範学校の農場に栽培して普及をはかった。

また、黒岩は読谷山村（現在の沖縄県中頭郡読谷村周辺）のある農家でサトウキビの優良な品種を栽培していることを聞きつけ、詳細な調査を行い“読谷山”という品種名をつけてその普及に努めた（沖縄で古くから栽培されていた“島萩”の変種として扱われたが、

中国・台湾・フィリピンなどで栽培されていた竹しょ、紅しょ、Uba などと同一種の *Saccharum sinensis*、染色体数 $2n=116\sim 118$ であることがのちにわかった)。その結果として、沖縄の産糖高が増加したことは沖縄の糖業史上特筆すべきことであろう。

1902（明治35）年、45歳のときに国頭郡組合立農学校（通称・国頭農学校）（のちの沖縄県立農学校、現・県立北部農林高等学校）の創立とともに教諭兼校長となる。その間に、前述したように沖縄県立糖業試験場技術員、沖縄県産業調査会委員、大日本農会農芸委員などを委嘱され、激務をきわめた。

国頭農学校時代の黒岩は、多くの資源植物、特用作物、果樹、蔬菜（野菜）など新しい植物・作物を導入し、沖縄農業の多用化をはかった。1914（大正3）年、57歳のときに沖縄県立農学校（国頭農学校）を辞め、沖縄の教育界から引退した。

その後、沖台拓殖製糖株式会社に招かれ、1920（大正9）年に同社を辞めて沖縄から引き揚げるまでの6年間、農場主任として牧原農場に勤務した。牧原農場では、混交林による防風林の造成、開墾地におけるサトウキビ栽培法などの農業改良試験を実施した。

黒岩は県立農学校があった名護から牧原農場へ引越す際、長年の膨大な標本や研究資料を全部名護の愛弟子の家へ預けてきたが、偶然の火災で全部消失してしまい、大きなショックを受けたようである。さらに、2人の子供にも先立たれるなど度重なる不幸に遭い、ついに1920年9月、かつて多くの希望を託した沖縄から馬夫人と2人で去った。

沖縄から引き揚げた黒岩夫妻は、郷里・高知県には帰らず和歌山県西牟婁郡瀬戸鉛山村（現在の和歌山県西牟婁郡白浜町）に落ち着いた。黒岩は、そこで東京帝国大学（現・東京大学）の嘱託を受けて淡水魚類の調査に没頭した。

その後、黒岩は馬夫人と2人で寂しい生活を続けながら、和歌山市、大阪市と住居を変えるが、1929（昭和4）年に大阪で馬夫人に先立たれ天涯孤独となる。

1930（昭和5）年4月、養子をとるために和歌山県伊都郡高野口町へ転居し、増谷保行（当時、小学4年生）氏（以後敬称略）を養子にする。それからわずか2カ月に満たない短い期間であったが増谷保行と2人きりの生活を送った。

1930年5月25日午前11時、増谷保行とその実父母に見守られて黒岩は他界した。享年71歳。法名は博量恒徳居士。沖縄の愛弟子たちがいつか必ずお墓参りに来るといって、増谷親子によって高野口町名倉墓地に黒岩夫妻の墓が建立された。

黒岩の人生は、少年時代・青年時代・壮年時代と順調に過ごし、とくに師範学校、農学校勤務時代は、教育者・学校経営者・農業改良普及者として業績を上げ、「黒岩校長」として卒業生や多くの農民に慕われ、博物学者「黒岩 恒」の名は広く学界に知れ渡り、その頃の黒岩は人一倍幸福であったものと思われる。

晩年は、2人の子供にも先立たれ、長年苦勞して収集した研究資料の消失など度重なる

不幸に遭い、和歌山県引き揚げ後も馬夫人に先立たれ、実に孤独な生活を送ったのではなからうか。

黒岩の墓は、増谷親子のほかにお参りする人もないようだが、来るべきはずの沖縄の愛弟子と同学の後輩のお墓参りを期待して増谷親子によっていつも清掃されているという。

最後に、黒岩が採集して学界へ提供した動・植物標本にはそれぞれの専門研究者の研究の結果、新種あるいは日本新記録として発表されたものが多数ある。その中から、黒岩が学界に貢献した功績を記念するため、学名および和名にkuroiwaおよびクロイワ〇〇〇〇と献名されたものがあるのでその一部を列記する。

セミでは、クロイワゼミ *Baeturia kuroiuae*、クロイワニイニイ *Platypleura kuroiuae*、クロイワツクツク *Meimuna kuroiuae* などがある。それ以外の動物では、クロイワトカゲモドキ、クロイワヤモリ、クロイワハゼ、クロイワトンボ、クロイワホテルならびにクロイワマイマイなどがある。植物では、リュウキュウマメガキ、シマヤマヒハツならびにクロイワランなどがある。

また、黒岩自身が新しく命名した動・植物の和名には、サキシマハブ、カラスヘビ、イワサキハゼ、コブヒメバチ、ヤエヤマアシナガバチ、フタトゲアリ、リュウキュウホシクサならびにキングヤツリなどがある。自然地理学上の調査研究で黒岩が命名した地名としては、本部半島、勝連半島、勝連湾、尖閣列島、奈良原岳ならびに和平泊などがある。

以上、若干の資料をもとにして黒岩 恒氏がツマグロゼミを発見したいきさつと黒岩氏の人生についてまとめてみた。誤った認識や間違いもあると思われるので、ご一読いただきご指摘いただければ幸いである。

また、本稿は東京農業大学沖縄県人会誌「はるさあ」第18号に筆者が寄稿したものに増補改訂を加えたものであることを付記しておく。

参 考 文 献

1. 青山俊雄ほか (1983). 黒岩 恒., 沖縄大百科事典 (上巻): 991. 沖縄タイムス社, 那覇・沖縄.
2. 天野鉄夫 (1977). 「黒岩 恒—沖縄自然界の学問的開拓者—」., 新沖縄文学, (37): 87—95.
3. 岩井洋一 (1992). 「ツマグロゼミを発見した黒岩 恒氏について—発見のいきさつと黒岩 恒氏の人生—」., はるさあ, (18): 24—27.